

巻頭言

ICID と研究者の役割

総合地球環境学研究所 渡邊紹裕

PC に向かい、この巻頭言の原稿を書いて、いや「入力」していると、この電子情報は協会会報の紙に印刷されるだけでなく、ホームページ上で公開されるのかと気になってきた。もしそうなら、より多くの人の眼に触れることになるなァ…、と少し戸惑いを感じつつ、ICID^{*1} や ICID 協会の役割や活動が、会員外の方にも広く分かりやすく発信されることは望ましいことと改めて思い、では分かってもらいたい活動とはどのようなものであるかとも振り返ってしまう。

私が、ICID やその国内委員会に関わるようになってまだ5年ほど。まだまだ、ICID のほんとのところは見えていないようだが、この間、勤務する総合地球環境学研究所^{*2}（通称「地球研」）で国際的な研究プロジェクトに関わりながら、海外での調査研究が増え、国際会議に出る機会も多くなってきたところで、ICID について研究者として個人的に感じていることを、いくつか書き出してみようと思う。多くの方の、ICID についての理解の少しの足しになって、貴重な紙幅を費やしたコストを帳消しにして頂けることになれば有り難い。

ICID は様々な顔を持つ。そのように見え、今でもどのようなスタンスで関わればいいのか時に戸惑う。前号の巻頭言で、ICID の前副会長の谷山さんが、「ICID 組織は NGO か政府組織か」を説明される中で、「ICID の二面性」として会員の性格や灌漑への認識・取り組み方の違いを分かりやすく解説されている。私が参加する「国際執行理事会」（作業部会）が開催されるときには、基本的に「国際会議」が併せて開催され、灌漑排水に関わる「国際的な取り組みの枠組みの議論」と「調査研究の成果の議論」が並行して進められる。が、両者は関わりを持ちつつもその話題がしっかりとクロスすることは少ない。これは、始めて参加する若手の研究者などの、ICID の性格の理解を難しくしているように思える。とくに日本は、ICID には政府として加盟し、日本国内委員会^{*3} は農水省の審議会で規定される政府組織として位置づけられていて、私ども研究者も「行政主導」で ICID に参加しているのが実態である。多面性・分かり難さは、組織・参加者や議論の枠組みだけでなく、議論の対象にもある。極めて工学技術的な話題から、社会経済や管理制度などの社会科学側面や、環境・歴史・文化などの人間文化の話題まで幅広く、そのウェイトも移動してきているようである。

ICID 協会の会員の皆様・企業の方々のご尽力で、多くの研究者が ICID に関わることができ、またその方向を展開されてきた先輩方には大変感謝しているところであるが、参加している研究者のほとんどは、いわゆる農業土木学の灌漑排水分野の専門家である。ICID が多様な性格と枠組みを有するのであれば、日本から参加する研究者ももう少し様々な専門分野を持つ人がいても良いのではないかと感じる。灌漑排水に関心を持っている農業土木学以外の分野の知り合いも増えてきたところで、少しずつ声をかけてみようかと思う。

自前のファンドで参加してくれる人がどのくらい出でてくるかは、私どもが学術的な関心をどの程度喚起できるかだろうか。こちらの力量が試される局面となる。

国際執行理事会に参加させて頂く機会を得ると、世界での灌漑排水に関する近年の話題・動向に触れることになる。いわゆる「International Context 国際的文脈」といわれるものである。例えば、「農民参加型灌漑管理(PIM)^{*4}」であり、世界水会議 WWC^{*5} の世界水ビジョン^{*6} などでも取り上げられた「フルコスト・プライシング」や「灌漑の多面的機能の評価」といったものである。この動きには、国際政治的なものや、国際機関・国際援助機関の戦略、単なるブームなど、様々なものがあるように思えるが、それぞれ取り上げられる背景や意図があるはずである。これを探る機会を否が応でも与えられるのが、研究者としては有り難いことになる。世界の関係者の「固まり」と「生で」会話し、また食事やコーヒーなどとともに本音を聞き出せることは、「International Context」の本質を見抜くまたとない機会となっている。

こうした意見交換は、世界的な社会的要請を吟味する有用な機会で、そこから新たな研究課題の発掘や吟味が進むはずと考えている。灌漑地区で、地域や流域で、国や地球規模で、本当にためになる研究は何か、現場で欲しがられているのではなく広く長期的に貢献できるものは何かを検討することになるはずである。

さらに、こうしたホットな議論を世界の関係者と交わしている時に、すぐ傍らには、国内のベテランの技術者・行政担当者の方がおられることも、有り難いだけでなく、とてもおもしろい。世界的な動向を、日本国内の動向や経験とクロスさせる議論をすぐに始めることができるのである。もちろん ICID の会議から帰国して、じっくり考え直すこともできる。

「International Context」を見定めることから、日本の経験・状況や技術を相対化して、理解や評価が進むこともあると思う。私自身、農家参加型灌漑管理 PIM を考え、ICID を通して参加することになった中東での「水需要管理フォーラム Water Demand Management Forum」(カナダ CIDA^{*7} 主催)における「Public-Private Partnership PPP」などを検討する過程で、日本の土地改良区・水土里ネットの意義と構造を再認識することとなった。これらの検討は、日本の技術や制度などを、海外で適用するときの基礎となるものでもある。

以上のメリットは、ICID でなくても、他の国際的な機関・国際学会でも得られることである。しかし、灌漑排水についていえば、ICID は世界で唯一の国際的組織であり、行政や地域の管理組織と連携しながら灌漑排水を総合的に担ってきた農業工学分野の研究者としては、その占める位置は大きい。

現在、地域や食料の安全性や健全な水循環は、研究展開が求められる喫緊の課題とされている。例えば、内閣府総合科学技術会議の定める「第3期科学技術長期基本計画」^{*8} (平成18年度～)でも、流域における水・物質循環は重点的に取り組むべき課題として扱われ、灌漑排水は地球規模での情報整備を含めた重要項目とされている。その中で、ICID やそこに関係する研究者・技術者の役割は、国内的にも重要なものとなっている。

一方、ICID 以外にも、立派な活動を展開する他の国際会議・国際学会もある。ICID のアジアでの活動は、水田灌漑がその一つの柱であるが、水田については「国際水田・水環境工学会 PAWEES」^{*9} があり、アジアの灌漑排水については、2003 年に設立された「アジア太平洋水文・水資源協会 APHW」^{*10} でも議論がなされる。今後は、ICID 参加研究者が、関係する他の国際的な学会、団体、研究プロジェクトと連携させながら、ICID での活動を展開させることが求められよう。JICA の各種プロジェクトや、各大学等での研究プロジェクトなどとの連携も同様である。

ICID の会議に参加しながら、いつも感じるのは、英語でのコミュニケーション能力を高めることの必要性である。国際会議でのパフォーマンスを高め、良い発表・議論を展開するためのトレーニングが必須で、若手の研究者には、早い機会にこの課題を「実感」してもらい、また学生・大学院生には、大学等での教育プログラムできちんと対応していくことが重要である。

まだ、ICID 学習中とのんびり構えていたら、先のクアラ・ルンプールでの国際執行理事会で、立ち上がったばかりの「地球規模気候変動と水」に関する作業部会の副代表 co-chair になってしまった。務まるものやらと懸念するところだが、ここはポジティブに考えて、またまたここに書き並べた勉強の機会を頂いたと考えて、一がんばりすることにした。

文中の*印のホームページ URL は以下のとおり。

なお、日本 ICID 協会のホームページ、http://www.jiid.or.jp/ICID_kyokai/にあり、少し前の号の巻頭言は、公開されています。

*1 The International Commission on Irrigation and Drainage (ICID) <http://www.icid.org/>

*2 総合地球環境学研究所 <http://www.chikyu.ac.jp/>

*3 ICID 日本国内委員会（農水省）<http://www.maff.go.jp/nouson/keikaku/8-icid/8-1/icidtop.htm>

*4 International Network on Participatory Irrigation Management (INPIM)
<http://www.inpim.org/>

*5 WWC <http://www.worldwatercouncil.org/>

*6 World Water Vision <http://www.worldwatercouncil.org/index.php?id=192>

*7 CIDA Canadian International Development Agency <http://www.acdi-cida.gc.ca/>

*8 第3期科学技術長期基本計画 <http://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/honbun.pdf>

*8 PAWEES International Society of Paddy and Water Environment Engineering
<http://www.pawe.es.org/>

*9 APHW Asia Pacific Association of Hydrology and Water Resources
<http://www.wrrc.dpri.kyoto-u.ac.jp/~aphw/APHW.html>